

楊淮表紀

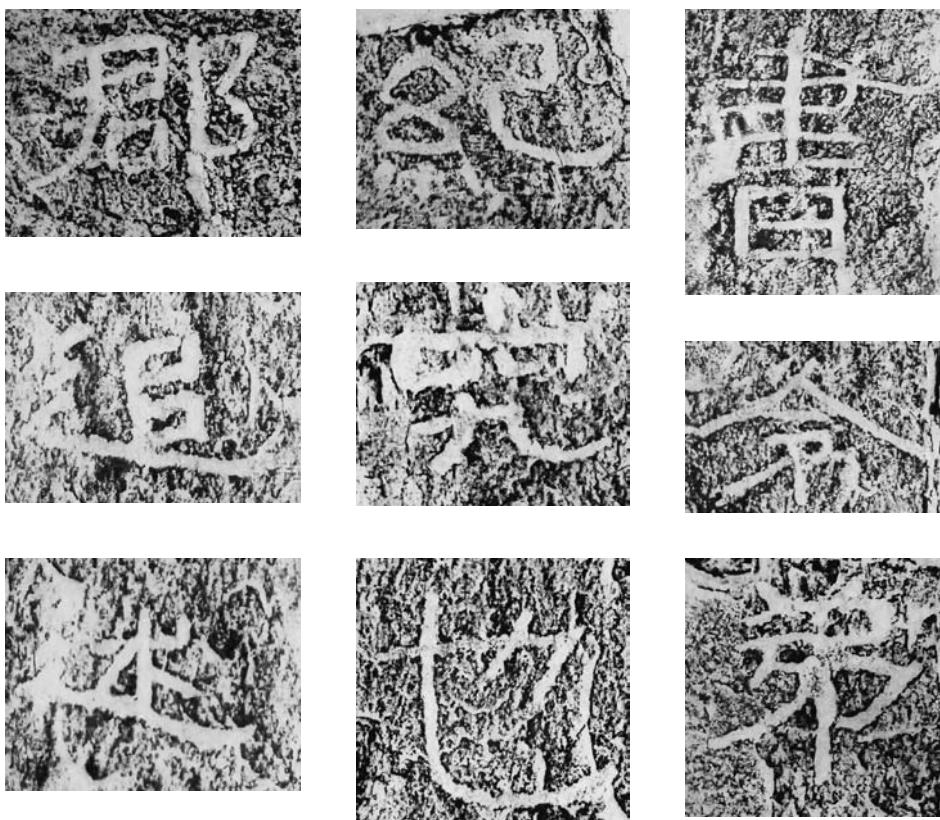
熹平二年(173)
(後漢時代)

雄大な摩崖刻石③

木雞

木雞室

凶坂②



図版③ 末行「黄門同郡」の「黄」字

「楊溫表紀」は、第一回の「開通褒斜道刻石」や漢の「石門頌」、北魏の「石門銘」と共に同じ漢中地域にある。摩崖刻石であるが、他の刻石に比して、それほど大きくなり、整拓本を掛けて鑑賞できる大きさである。縱一メートルほど、横六十七センチ。「開通褒斜道刻石」を始めとする漢中摩崖は、ダム建設にともない切り離されて、漢中博物館に移設されている。後漢末の「八分隸書」が隆盛を極めた時代の刻石であるが、流麗な波磔などは見られず、大変に「古拙」な趣の強い書風である。摩崖特有の石面の粗さが、大きな要因となって、このような古拙な線質や書風を生み出しているのであろうか。図

版②に示したように、古拙さの中にも①謹直な趣（書、令、弟の文字）、②やや安定を欠いたアンバランスな趣（紀、究、也の文字）、③伸びやかで行書の筆意を感じさせるような流動的な趣（郡、追、述の文字）を見ることができる。大変に親しみを感じさせる書といえよう。しかし摩崖の石面は大変に荒れていて、文字が不鮮明な部分が多い。旧拓本は、末行の「黄門同郡」

次回は、「郵閥頌」です。この欄に
関すること批評、ご意見、ご希望、ご質
問などをお聞かせください。私宛に直
接メールで、また編集部宛にお送りた
だければ幸いです。

拓本は末行の「萬體同群」の「黃」字が見ることができると諸書に記されているが、近拓、新拓でも見ることができる。「黃」字を見ることができないものが、逆に旧い拓本である場合がある。原石の状態から推測するに、本来の石面の凹凸が大きい部分であり、拓本の取り方により左右される（図版③参照）。一行目の「楊君」の部分と同じである。

となつて、このような古拙な線質や書風を生み出しているのであらうか。図

図版① (やや縮小)

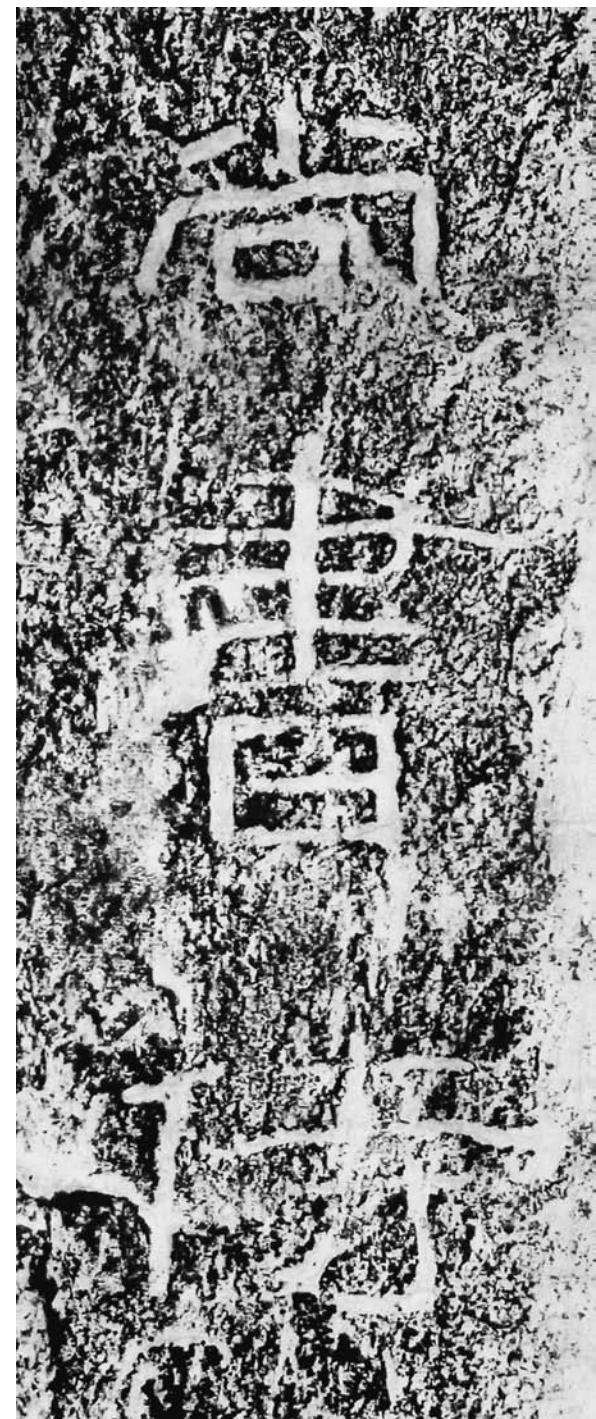
帰

過

此

追

述



尚

書

侍

書道芸術院 平成の群像 (2011)



第54回書道芸術院展 峰雲賞受賞作

書 「出逢いの力」



加藤眺溪

幼い時より皆から書家の家に生れたのですからと良くいわれ、父青巖は生前「今良寛さん」といわれ親しまれていた。父の主幹する青峰会で「穂高」誌を出版していた表紙にと棟方志功氏と山本重水先生が時々見え窓炉裏を囲み「オキリコミ」が大好きといって食べて行かれた。父は秋山白巖の家弟子をしまた白巖も徐三更の家弟子で過ごし、祖父も師山岡鉄舟の元で過ごした身でしたので父の一言で三年間との約束で昭和30年書道芸術院、新宿四谷の香川峰雲・春蘭先生の家弟子に入る、半年後父急に他界夢は消え無我の境地で13年間お世話になりました。思い出は山程ですが、池袋のスケートセ

ンターのオープンで春蘭先生と「回転」と氷の上に大字を書いた事やまた新宿コマ劇場の柿落として舞踊家の岩井半四郎さんが踊るバックに十二間の十二間の大きさに倫子先生が書かれるのを手伝った事、大字は体が宙に踊って書く事を知りまた細字は春蘭先生の論語全文を六曲屏風に書かれた作品峰雲先生の作品の数々を目の前で拝見自分の無能さで無我夢中でした。先生はいつも私に書家は評論家にならなくてよい自分らしい作家になればよいといわれ書の深さを体験させられました。書の教室一般部から書道芸術誌創刊号より六〇六号、単位講習会今年で37回、第一回より参加単位修得証第八号昭和40年8月22日気仙沼会場で頂く、今年の3月11日未曾有の大震災痛恨の極みでございます。書道芸術院の皆々様の御健筆をお祈り申し上げます。先生方に感謝しつつ生涯牛歩の如くこの道を歩みます。

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

東日本大震災にめげず 第63回毎日東北仙台展盛会に

東京国立新美術館東京展を終え、関西展から順次地方展が開催され、9月15日から東北仙台展が開幕した。初日には開止人理事が担当として訪れ、オーピニングセレモニーが行なわれた。17、18日にかけ担当理事として昨年に続き訪問した。会場の仙台メディアテークは今回の震災の影響で使用が危ぶまれたが、幸い被害は展示会場にはあまり影響なく、無事開催できたことはありがたかった。

とりわけ本院会員が多数を占める東北仙台展である。被災された方も多く、関係者のご苦労は計り知れないものがあつたと思う。佐々木旭峰実行委員長の元、千葉蒼玄陳列部長はじめ多くの役員の献身的なご努力で会場は見事に出来上がっていた。震災の影響から昨年より180点ほど陳列数が減少したというが、すっきりと見やすい陳列は好評で、21回目となる宮城県選抜高校生書展入賞作品は出品増から展示数も増えたとのことである。

18日10時半より会場にて作品解説をさせていただく。地元有力作家を中心において毎日書道会理事作品まで時間が来に毎日書道会理事作品まで時間が来る

てしまい、中途半端で終了。その後参考揮毫をということで当地に関わる詩歌をテーマに3種類揮毫させていただいた。

その後会場を移して「勝山館」にて出品者の集いが200余名の参加で入賞者の顕彰式など盛会であった。席上揮毫作は別揮毫の色紙と共に参加者に抽選で贈呈させていただいた。

第63回毎日書道展を象徴する東北仙台展が見事に開催できることは、今後の復旧復興に向け大きな力となつたことと思う。感謝、感謝。



会場にて作品解説を行う

牧泰濤はじめ歴代支局長のご努力に敬服、会員数は他に比べ少數であるが会員諸氏の協力体制が実を結んで今日に至っている。

9月7日から11日まで大分市アート

プラザにて開催。恩地春洋会長、辻元大雲が贊助出品。本年で16回目を迎える。

9月9日、10日、千葉蒼玄事務局長と共に訪問、10日には会場にて作品解説を参加者全員の作品について行つた。九州支局は漢字を主とする牧泰濤

グループ、池内岳城グループと現代詩文書・刻字を中心とする福岡和光塾グループが主力で、それぞれ多彩な作品

を発表している。特にこの支局展では普段の作品とは傾向の違うものに挑戦されている方が多く、意欲的な姿勢が見られたのが評価される。

今後は会員数の増加を期待し、ますますの発展を祈りたい。

第77回広島熊野筆まつり

広島の熊野町は日本の毛筆の8割以上を生産し、今では化粧筆が世界的に有名になっている。先般の女子サッカーワールドカップ優勝のなでしこジャパンのメンバーにご褒美として「化粧筆セット」が贈呈されたのをご記憶の方も多いと思う。

その熊野町では毎年9月23日に「熊野筆まつり」の大イベントを実施しており、今年は77回目を迎える。本イベントでは筆供養、筆の市、筆づくり実演など各種の催しが繰り広げられる。



揮毫風景

東日本大震災の影響をまだ受け続けなければならない日本の現状を憂いつ、「がんばれ日本! がんばれ書道!」の想いを込めて一大事業を終えることができ、ご支援いただいた会員諸氏に深く感謝申し上げたい。

中でも大作席書は今回で19回目を迎え、初代は今は亡き金子卓義氏である。毎年著名書家が一人担当し、毎日系と読売系など交代する。昨年は日展評議員の今村桂山氏であった。

今回はからずも私がご指名を受け揮毫。

5m×6m、約20畳敷きの巨大な紙面(サテン系の布地)にお借りした

直径20cm、鋒先30cmの大筆にて、「筆の舞う里」と一気に大書させていただく。

多くの方々の応援を背に、折から台風

一過の秋晴れの下、実に爽快、気分よく書かせていただき大作と同じ内容の

全紙1/3大の石碑も建立され身に余る榮誉を賜った。

東日本大震災の影響をまだ受け

続けなければならない日本の現状を憂

いつ、「がんばれ日本! がんばれ書道!」の想いを込めて一大事業を終

えることができ、ご支援いただいた会員諸氏に深く感謝申し上げたい。

刻字(一)

小山鳳来

苦手な原稿依頼があったのは6月中旬、毎日展の作品が追い込みに入ろうとしていた頃。これは「エライ」となった。と「兎を追えない不器用な私にとっては一大事。先づは目の前の一兎を追い込んでからさらに一兎を追わなければならぬ氣掛りな日々となつた。

いまにして思えば私が書の道に入ったのは誠に不純な思いからだった。

自家営業で四六時中家にいる親からなんとか逃れ様と画策する子供達に獎められて選んだのが筆一本の書の道。習静書道会の看板を見て入会を申し込んだが「旦那の習い事ならお断り」と、思いに反して断られそうになり、それではと意地になつて粘つた末によ



小山鳳来刻

21世紀の書

私の主張

うやく入門の許可が出た。いまから余年前の夏の暑い日のことである。

漢字(一)

加瀬澄春

『21世紀の書私の主張』の原稿依頼を6月下旬にいただき、この38年間極めて気軽に書道を続けていたが果たしてその資格があるのか疑問に思いつつもご指名です。

38年間極めて気軽に書道を続けていたが果たしてその資格があるのか疑問に思いつつもご指名です。この機会に自分の書道を振り返り見直してみたいと考えました。

人それぞれ書道を始める動機は違うでしょう。私も毛筆の年賀状でも書ける様になりたいと、近くにお住まいの古橋飛山先生の元に伺いました。当時先生は書道芸術院の中核を担つて活動の傍ら、市

井の一書家として塾を開いて後進の指導に当つておられました。

書道の勉強の順序としては、唐時代の骨格のはつきりした楷行から始めるか、または文字の発達に従いカリキュラムを組むか、だと思いますが我が師の方針は前者からでした。唐の虞世南や歐陽詢なら素人目にも美しい。私も

虞世南の孔子廟堂碑より教えていただけたが楷書は際限がありませんので次に蘭亭叙、集字聖教序と続き草書の十七帖や書譜と進みました。師は特に蘭亭叙がお好きでご自宅の庭を曲水の宴の出来る様改造した程でした。しかしこれらの師の手本は原帖とは全く違ふ様に見えて大変困惑致しました。

法帖の魅力がわかるまでは長い年月が必要でした。写真は当時の手本です。

古橋飛山先生の蘭亭叙の臨書手本



「書と共に」

浜 口 瑞 香

(漢字部・審査会員)

「書話シリーズ」の原稿の依頼が突然届き、大変戸惑いました。私は60余年間、ごく当たり前のように、書と共に歩み続けてきました。しかし、これを機会に今一度、この道のりに想いを馳せてみようと、思い切ってペンを執ることにしました。

母の勧めで近所の習字教室へ通い始めたのは、5才の時でした。時には優れた作品を教室に貼り出してもらったり、コンクールで受賞できることが嬉しいで、頑張って書いた事を覚えていました。ただひたすら手本を見て書くだけの子供時代には、「翠軒流」の豊かさ・のびやかさを、いくらか身につけたように思います。

大学進学は、地元の教育大学へ、書道部へ入部し、そこで岡本白濤先生に出会い、瑞香という雅号をいただきました。学生時代は臨書三昧。一年生は九成宮、蘭亭叙は二年生、統いて枯樹賦、書譜など、同じ法帖を繰り返し書き続けました。古典に取り組んだこの

頃、やっと書道に入門したと実感していました。

その後、就職しましたが、縁あって短い教師生活に終止符を打ち、故郷(名古屋)から遠く離れた高知へ嫁ぐことになりました。当時、四国は私にとってまさしく「海外」。数年間、通信教育で書道を学びながら、寂しさを

面を構成し、筆・墨・紙の効果も加わって、作品は一層生き生きとします。

その魅力ある「大字書」に取り組んでみたものの、その奥の深さは言うまでもない事、十年余りの間、模索し苦しめ続けました。その間、どれ程師に心配をお掛けしたことか…。

「根気よく書き続ける事が大切。い

紛らわして過ごしました。

少し子育てに余裕のできた頃、書道の市民講座を受講し始め、やがて現在の師である大野祥雲先生と出会う事になり、以後30年という年月が流れ、今に到っています。

師との出会いは、「大字書」との出会いでもありました。

素晴らしい感動を書で表現しようとすると、大字書は、人の心に素早く大きな響きます。題材を自由に選び、紙

こうして長かったです、やっとス

タートラインに立つ事ができました。いいよこれからが本番、終りのない道のはじまりです。必ずしも前進できるわけでなく後退することも多くあるでしょう。師の教えをかみしめて精進していきたいと思つております。

多くを聞き、多くを見、多くを習う。無限の宝庫である古典の学習、心身の鍛錬も忘れずに。

以上、拙い私の半生を振り返ってみました。辛い時も楽しい時も、いつも書と共に生きてきました。そして書を通して多くの人に出会い、素晴らしい書友にも恵まれました。

ようやく、自分のために時を自由に費やすことができるようになった今、これ程までも夢中になり、打ち込めるものがあることの幸せを実感しております。

最後に、自分を振り返るよい機会を与えてくださった事に、お礼を申し添えます。



浜口瑞香書

平成23年度 新審査会員作品

II

谷田熾鑑（漢）・藤原紅雲（前）・加藤紫翠（現）・原 博峰（現）

谷田 熾鑑
(大阪)

「眼」



師は玄遠社竹扇会・小伏竹村先生。「古典を学びなさい」「時はつくるもの」と言う師の言葉が今になり心に響くようになりました。昇格を機に“眼”をしっかり開き、迷わず書と仕事の両立に精進していきたいと思います。皆様、今後ともよろしくご指導の程お願い申し上げます。

(熾鑑)



加藤 紫翠
(宮城)

「沙羅の花苔にこぼれて
静かかな」 村上鯉魚句

心に響いた詩文、歌、句に

出会った時、音楽のように時に快く、時に哀しく、私の心は満ち足りた気持ちになります。

大震災での犠牲者をしのび、鎮魂の祈りを込めて書きました。師加藤紫翠柳先生の優しい眼差しと微笑みを忘ることなく、諸先生、書友に感謝しつつ精進して参ります。

(紫翠)



原 博峰
(岡山)

「この道しかない
春の雪降る」
種田山頭火の句

師司前光峰先生はじめ諸先生方の温かいご指導、書友の励まし等により書の道を歩んでくることができました。

これからも「この道しかない」と努力精進すると共に「この道」を歩める事に感謝し、前進して行きたいと思い

(博峰)



藤原 紅雲
(宮城)

「生きる」

この度の大震災を経験し、あらためて「生きる」ということ「生かされている」ということに感謝の気持ちでいっぱいです。古典とともに線を鍛え、唯無心に紙と向き合い、日々精進して参りたいと思います。

(紅雲)

平成23年度 新審査会員作品

下村春香（漢）・小野寺三枝（現）・白地清柳（現）・澤田雙鶴（現）



下村春香
(大阪)

「海」(甲骨文)



甲骨文の出会いから十数年 小伏竹村先生の熱いご指導のもと、字形・象形のおもしろさにはまりました。これからは、切りこむ強い線の追究です。樂しさの中から、感動ある作品づくりに精進いたしたいと思います。

(春香)



白地清柳
(宮城)

「夏／祭りに弾ける季節……。

東日本の震災復興は、ここから始まるのだ。」

トランヴェールより

加藤翠柳先生と諸先生方の御指導に感謝し、今後も精進致します。

(清柳)



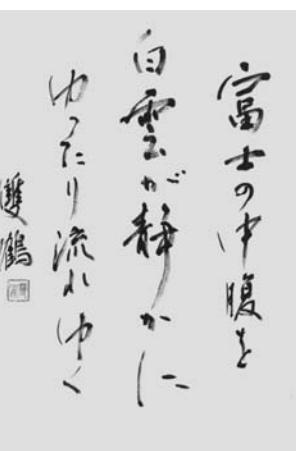
「月下美人」

この度の大震災の際は、温かいお心づかいをいただき、お礼を申し上げます。先日一夜限りの花「月下美人」の開花を見る事ができました。純白の大輪の幻想的な美しさに心が和み、淡墨で表現してみました。穏やかな生活が戻りますようにお祈りいたします。

(三枝)



小野寺三枝
(宮城)



澤田雙鶴
(千葉)

「富士の中腹を白雲が静かにゆったり流れゆく」　自作

審査会員昇格拝命、白扇書道会の諸先生と仲間の支えのお陰です。故種谷扇舟先生が愛した富士を詩に書いてみましたが。師より古典を大切にし、「継続は宝」と情熱を持つて白と黒の美の表現を追いかけています。(雙鶴)

第47回 書道芸術院単位認定講習会

会場＝富山県高岡文化ホール・ホテルニューオータニ

会期＝平成23年7月30日（土）～31日（日）

主管

北陸支局長 津田 海仙

事務局長 大石 仙岳

【篆刻】

講師＝加藤 眺渓先生
助講師＝柘野 青渓先生

助講師＝久保田 廣先生

今年度の単位認定講習会は、銅器の街、富山県高岡市で開催された。前日には、福島・新潟両県が豪雨に見舞われたが、役員・講師・助講師の先生方20名をお迎えし、受講生104名で、盛大に開催された。

開会式では、東日本大震災の被害を受けられた会員の方々が多くおられるということを聞いて、身の引き締まる思いをした。

辻元大雲理事長・恩地春洋会長の挨拶で始められた開会式のあと講習会に入り、会場は受講生の熱気に包まれた。

加藤先生より、三角刀による筋彫りから作品完成までの手順をお聞きしたあと、各自「ややもすると刀意が弱くなるから注意するように」という先生のアドバイスを念頭に置きながら作品の制作にあたった。そして彫り上がった文字の部分に好みの色が塗られると、青や赤・緑で着色されたカラフルな作品が会場のあちこちで完成し、華やいだ雰囲気を醸し出していた。あつとう間の一時間二十分であった。



開 講 式

役員紹介



恩地会長挨拶



加藤眺渓先生による実技指導

【前衛】

講師＝山口 仙草先生
助講師＝知野 洛水先生

はじめに、山口先生の講義を受けた。先生は、「相田みつをの書には前衛書と似ているところがある。前衛書作品の制作にあたっては、従来の作品の枠にとらわれることなく、自己の人間性と現実に取り組みながら、独自な意味としての新しい形を造形することが大切である。また、古典の追及による成果を作品に結びつけることも大切で、常に字形・線質・リズム・墨色などについて創意工夫が要求される」と話された。その後、実習に入り、参加者がそれぞれの思いを作品に託した。



毫 挥 作 品

山口仙草先生揮毫



揮毫作品



小林琴水先生講義

【漢字】

講師＝小林 琴水先生
助講師＝石田 春慈先生

「祭姪文稿」を題材として顏真卿の書について学んだ。①大字書の場合、そのときどきの書く人の気持ちが自然と表現される。②作品制作にあたっては筆を紙から離すときは静かに少しだけ宙に浮かせるようになるとよい。③筆をねじったり広げたりするとよい文字になる。といったことについて教わったあと、各自「開國」の一文字を臨書して提出した。

先生は終わりにあたって、臨書をするときは空間（白い部分）をよく見ることが大切で、頭で思っている形とは違うことがよくあるから注意するようと話された。



小林先生による実技指導

【仮名】

講師＝石井 明子先生
助講師＝平川 峰子先生

はじめに、「いろはうた」について講義を受けたあと実習に入った。なお、現在使用している平仮名は、明治三十三年に幾種類も用いられていた同音の文字から一音一字に整理されたものである。こら以外は変体仮名と呼ばれ、古典に多く用いられているから前後の仮名とのかねいで読み解くことに慣れることが大切だということであった。

揮毫作品



平川峰子先生による実技



石井明子先生講義

【現代詩文書】

講師＝小竹 石雲先生
助講師＝大平 邑峰先生



小竹石雲先生講義

「古典に学ぶ表現の工夫」（鄭道昭）と題して小竹先生の講義を受けた。その後、鄭羲下碑の雰囲気で書かれたお手本を見ながら、粘りのある線でゆったりと大らかな雰囲気が出るよう練習を重ねた。先生は「全体の雰囲気を見て味わいながら書くことが大事である。いろいろな見方や考え方を吸収して帰ってほしい。」とおっしゃった。

辻元大雲先生揮毫

講師＝辻元 大雲先生
助講師＝三浦 萬城先生
鄭街先生



揮毫作品

【原拓書道史】

書道史が概観できるよう、先生が所蔵している拓本の正本約八十点が展示された。それを鑑賞しながら、種谷先生から講義を受けた。拓本の一字一字から筆者や刻者の筆意や思いが伝わり、感概深かった。また、顔法・褚法・欧法など書法について自分の目で確かめることができ、大変よかったです。



種谷萬城先生講義

自由に拓本を鑑賞



【院史】

講師＝恩地 春洋先生
助講師＝前田 龍雲先生

昭和二十二年十一月二十三日に創立されてから今日に至るまでの六十四年間の書道芸術院の歴史について、スライドを通して講義された。今日私たちが書道芸術院で書を学ぶことができるのも、多くの先人のおかげであることを感じた。終わりに先生がおっしゃった「自分の精一杯のことをやってほしい」という言葉を忘れず邁進したいと思つた。



故深松海月先生の作品

万葉集を写したいわゆる古写本と呼ばれるものが存在する。すなわち、桂本万葉集・類聚古集・西本願寺万葉集・金沢文庫万葉集がこれに属する。これら古写本には、王羲之を手師の意から「テシ」と読む例が見られる。

また、万葉集には漢字本来の意味とは無関係にその音訓を仮に用いて日本語の発音を写すといいういわゆる「万葉仮名」が見られる。万葉仮名には特殊な仮名遣いが見られる。特に、キヒミケヘメコソトノモヨロエには甲類・乙類の二種の仮名遣いがあるから、万葉集を作品化するときはこの仮名遣いに忠実であることが要求される。

【講演】（一般教養）
「万葉の文字」

ホテルニューオータニ
高岡市万葉歴史館館長

坂本 信幸先生



受講者代表謝辞



単位認定書授与



坂本信幸先生講義



第47回 書道芸術院単位認定講習会



主管=津田海仙支局長挨拶

全国から多くの方が参加してくださいましたことは、スタッフ一同としてこの上なくうれしいことであった。終わりにあたって、先生方をはじめ皆様のご厚意に心より感謝申し上げたい。
(文責 竹脇 敬一郎)

用紙 半紙普通判 左の法帖の中から
何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

〈解説〉

蘇孝慈墓誌銘は、隋の仁寿3年（603）の刻で、全文1292字、墓誌銘としては大型の部類に入る。光緒14年（1888）に陝西省・蒲城県より出土した。

内容は孝慈の暦官、世系、功績を記しており、碑文大きさは縦・横ともに約83×5cm、37行、行37字で、は極めて鮮明、破損や摩滅がほとんど見当たらない。

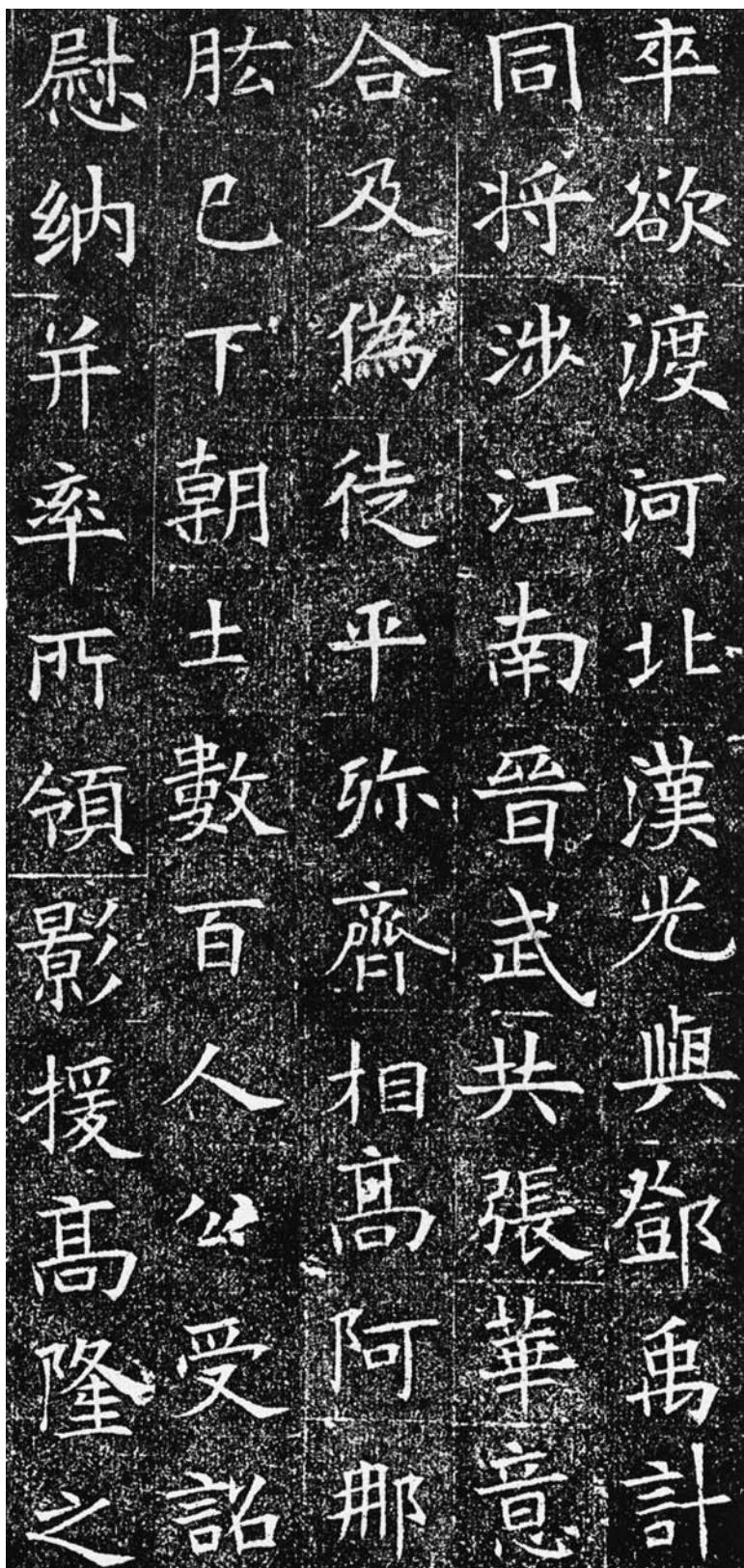
特別研究部臨書課題

II（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる

署名、もしくは

○○臨
(押印のみも可)



卒欲渡河北。漢光與鄧禹計同。將涉江南。晉武共張華意合。及偽徒平殄。齊相高阿那肱已下朝土數百人。公受詔慰納。并率所領影援高隆之。

かな研究部

でか葉本和漢朗詠集（伝藤原行成筆）①

特別研究部臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

（注）かな研究部競書作品は、
上の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

<よみ>

わか可能のうらにしほみちくらしかた多能
なみあしへ尔能をしてたづ多能なきわ那支たる
おほぞらにむれたづ能のさし能なが那支たる
おもふこゝろのありげなるかな能が句
あまつかぜふけゐのうらにゐるたづ能
などかくもゐにかへらざるべき支能

※落款を必ず入れる。署名、
もしくは〇〇臨
(押印のみも可)

用紙
・半紙普通判（料紙可）

（たて長に使用）

※別紙を裁断して貼付も可。
・半懷紙は、半紙サizesに切つて使用のこと。

<解説>

宮内庁保管の「和漢朗詠集」

完本三部の内の一つで、粘葉

という製本の形式によって粘葉本和漢朗詠集と呼ばれる。

料紙は舶載の唐紙で、草、茶、
黄、藍などの地に雲母で唐草、
雲鶴、龜甲などの文様を刷つてあり、雲母にも白と黄の二色が用いられている。この料紙の表裏両面に書写されて上

下二巻に収められている。上

巻は春夏秋冬、下巻は風、雲、

山水、慶賀など、漢詩と和歌が交互に数首宛書かれれる。

粘葉本の字形は漢字もかなも概ね平たい。かなの書風は高野切第三種の系統に属し、端正で軽快な癖のない上品さで、連綿も短く連綿線もわかりやすい。

筆者は藤原行成と伝えられ、11世紀半ばの書写とされる。

習い方解説 (-)

辻元大雲

海遠雲高
(海は遠くまで見渡せ、雲は高く
浮かんでいる)

今月より担当します。四字句四
回、五字句二回です。

今回は秋の気候に合わせた爽や
かな句です。しつとり落ち着いた
雰囲気をねらい、羊毫中鋒筆を使
用しました。

上級者は書体自由ですので、色々
な表現を試みてください。作例は
穏やかな行書表現です。王羲之の
集字聖教序あたりを念頭に置いて
みました。

行書表現の場合、運筆のリズム
が大切です。自然な筆脈の流れに
潤滑の変化が加わり、更に表情が
豊かになります。字形の工夫も大
切な要素です。あまり特殊なくず
し方は避けたほうが無難ですが、
行書特有の書写体は一般的に使わ
れますので、字典等でよく調べま
しょう。活字体そのままでは逆に
堅苦しく、不自然になってしまいます
ようです。

書体=自由



海遠雲高 よみ(海遠く雲高し)

習い方解説（一）

飯田春香

天氣清和（張協）
(秋空の氣は澄み且つやわらぐ)

今回より六ヶ月間は、初唐の三

大家の中から、歐陽詢の代表的な
九成宮醴泉銘を基に勉強していくこ
うと思います。

歐陽詢の生い立ちは厳しく、逆
境をはねのけるべく学問に精を出
し、不屈の意志を持って唐の太宗
の重臣となりました。

これを勉強するには、運筆に勢
いが必要です。形は直線的で清ら
かさを出しましょう。運筆に勢い
がないと固苦しくなりますので注
意してください。筆は剛毛、兼毫
が適しているかと思います。
氣、清の横画の間隔が広くならない
ように注意してください。

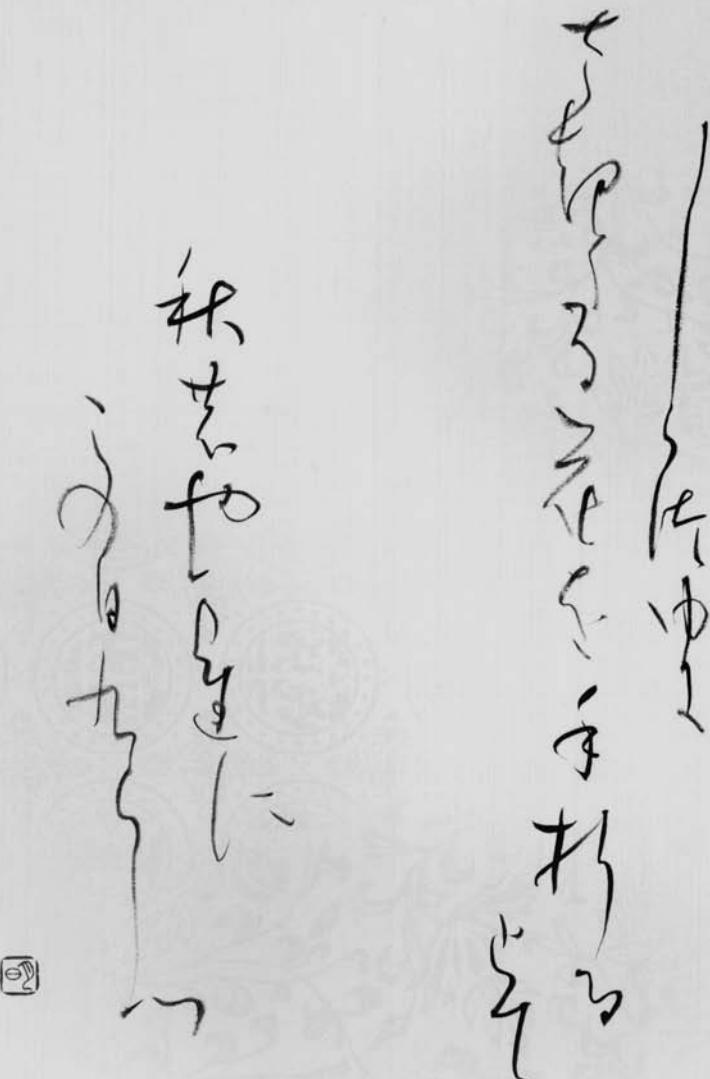


石井明子

白露に咲きたる花を手折る
秋の山路にこの日暮らしつ（良實）

かな作品は、平がな、片かな、
変体がな、漢字によって構成され
ます。全体の調和を考え、それ
ぞれが元のままの字形で使われる
ことは殆どありません。手本を参
考にして学ぶとき、そのデフォル
メされた字をよく理解せず、誤字
を書いてしまうことがあります。
よく知っている字も、書く前に字
典で確認してから練習に臨んでく
ださい。準備に時間を割くことに
よって誤字は解消できます。座右
に、かな字典、書道字典を置きま
しょう。謙虚になれます。

書の線はどんな線も向う先があ
り、志をもって動いています。め
り張りが失われないように、草の
葉のような、笹の葉のような形の、
かなの線を意識しながら制作して
みました。



創作

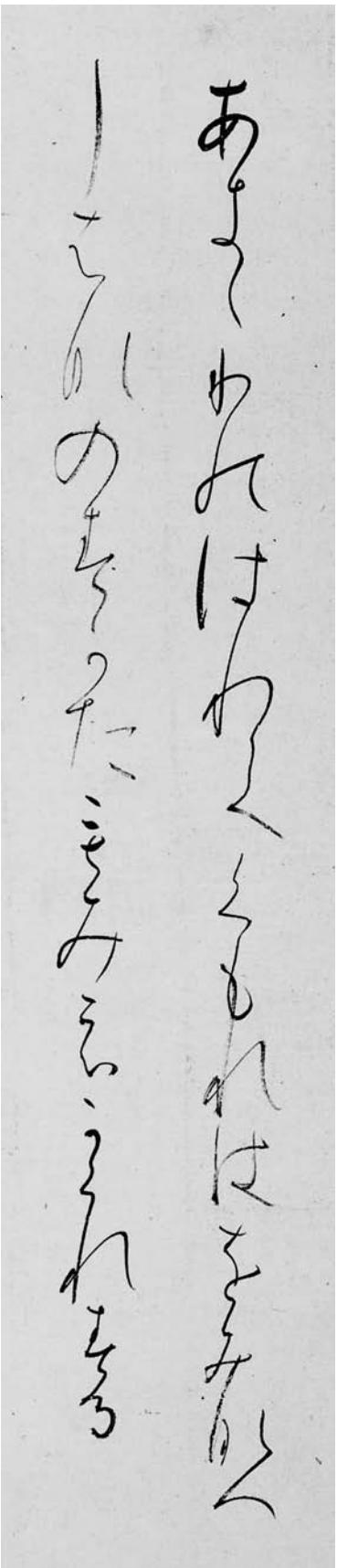
よみ方

しらつ(徒)ゆに(尔)さき(起)た(多)る(留)花を
手折る(とて)秋の(農)やま(万)ち(遲)にこの日く(九)らしつ(川)

かな規定 秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ （料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全體、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

高野切第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 あき(支)ゞり(利)の(能)はれて(豆)く(久)もればをみな(那)へ

しは(者)な(那)のす(春)が(可)たも(毛)みえか(可)く(久)れす(春)る

※9月号の課題が予告と異なりましたことお詫びいたします。
どちらの課題でも通常どおりの審査となります。

かな条幅規定【十一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切（料紙可）

奥田瑞舟選書

奥田瑞舟

習い方解説 (一)

秋立つと思ふばかりを吾が宿の
垣の野菊は早咲きにけり

(伊藤左千夫)



一行目字数が多くなりました。
文字に大小や、二字、三字の連綿で余裕を作り、せせこましくならないようにしてください。
行頭の秋と垣、漢字が並ばないようにします。

よみ方 秋た(多)つとお(於)もふば(盤)か(可)りを(越)わが(可)宿の
か(可)き(幾)の野菊は(八)は(者)やさ(佐)き(支)に(一)けり(里)

創作

かな作品に漢字が多い、と言わ
れた時もありましたが、かなと調
和して、流れが自然で拡張よりも生
まれたら成功だと思います。

*たて形式に限る

漢字条幅規定 初段以上 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

竹田尚堂選書

習い方解説 (一)

竹田尚堂



十月江南天氣好 可憐冬景似春華
(十月江南天氣好し、憐れむべし冬の景の春に似て華しきことを)

書体=自由

白居易の「早冬」の首聯。陰曆
十月の江南の小春日和の明るく華
やかさのある情景を詠んでいます。
その詩情を得たいと、気脈が一貫
するよう、筆が騒がないよう運び
ました。

詩情を表現することは至難ですが、
詩句を繰返し読んで内容を解
し、情景を心に描くことから始ま
ります。

漢字条幅規定 秀級以下 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

小浜大明選書

習い方解説 (一)

小浜大明

これから三回は半切一行で楷書
作品を学んでいきます。

今回の参考手本は、顏真卿の楷
書の特徴でもある「向勢」をとり
入れて書いてみました。

課題の語意は、「徳のあるもの
は、自然にその人物が世に知られ
る」です。
ゆつたりと、伸びやかに表現し
てみてください。

大明書



徳厚者流光
(徳厚き者は光を流す)

穀梁

書体=自由

習い方解説 (-)

見越雪枝

前略 市民文化祭の一環としての美

術展が十月十日～十六日、市民ホール
にて開催されます。私も細やかな作
品を出展しておりますので、ご高覧
頂ければ幸いです。

右、ご案内申し上げます。

かしこ

雪枝書

今月より六回担当します。葉書の大
きさなので、「はがきの書き方、実用
文例集」を元に御案内します。

初めに、葉書文は大きくは前文、主
文、末文の三要素を織り込み、目的に
そった文章を作るとよいでしょう。

前文(a)頭語(b)時候の挨拶(c)先方又是
当方の安否の挨拶(d)感謝やお詫び挨拶
主文(e)起語(f)本文
末文(g)結びの挨拶(h)結語

10月ですので、芸術の秋に因み、一
般的な美術展の案内状を例文にします。
書き方は、上下左右の余白は等間隔
に、楷書で、然し固くならずに書いて
みましょう。

(結語は、あえて差出人女性として
かしこにしました。)

※落款を必ず入れる。

(自分の名前を入れること)

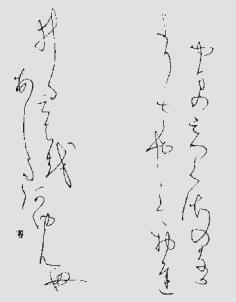
用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

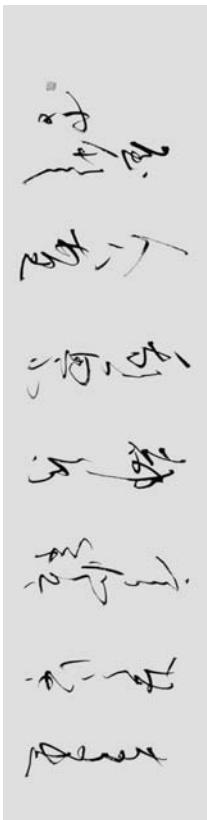
今月の

ホープ作品
各部総評 NO.604

かな部 師範 佐藤 麻美
面相筆を駆使し生氣溢れるリズムが庄重です。細かい勉強出来た方なので少しづつ創作を始めたい。
◎かな部総評 参考手本に頼りすぎも寂しいが、そうでないものとの差を感じた。字の組合せ、疎密など十分な推敲を！（洋子評）



漢字条幅部 師範 鶴山 美柑
三国の鐘繇の風を得て、滋味溢れる作。柔毫筆による暢達した線が落ち着いた雰囲気を醸して妙。
◎漢字条幅部総評 上下級共課題がやや難しかったか。全体に弱々しい表現が目立った。大小粗密の変化など大胆な工夫を。（大雪評）



かな条幅部 師範 鈴木 朝夫
行間、上下のあきが効果的で引き締めた作品です。省略美の極致です。少し湿度感を考慮しては？



◎かな条幅部総評 全般に不明瞭な字が目立ち残念。字の大小の均衡はかな作品として考慮のこと。
墨色、墨量は控えめに。（明子評）



現代詩文書部 特選 森田 藤谷
氣宇雄大で潤渴の変化絶妙。筆先が紙面に食い込み、淡墨が冴えます。上下一群もよく調和する。
◎現代詩文書部総評 作品づくりで大切なことは、リズム、造形、墨色の三点が特に大切。（石雲評）

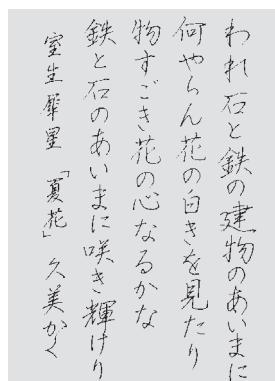
前衛書部 特選 堀 あつ子
筆を自由自在に運ぶ多彩な線質、さらに白と黒のバランスがよく、落書きある作品となっている。
◎前衛書部総評 作品はレベルアップしている。さらなる前進と前衛書の拡大を願う！（光昭評）



ペン字部 師範 大橋久美子
重厚な堂々とした書き方で深さを感じる作品。細部まで神経の行き届いた快作で立派である。
◎ペン字部総評 上位作は見方、書き方もよいが、流れを出すあまり弱くなった作も見受けられた。ひたむきな制作を。（蒼玄評）



◎漢字部 師範 小林 藤穂
軽快なりズムで筆が舞い、情感に溢れた線が魅力的な作品。品性高く、優れた感性が窺える。
◎漢字部総評 上級者に古典学習を基礎とした品性高い創作が多数見られました。着実な学書方法です。（萬城評）



ペニ字部 師範 大橋久美子
重厚な堂々とした書き方で深さを感じる作品。細部まで神経の行き届いた快作で立派である。
◎ペン字部総評 上位作は見方、書き方もよいが、流れを出すあまり弱くなった作も見受けられた。ひたむきな制作を。（蒼玄評）

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

臨書

(大雲)

阿部 恵泉

「集字聖教序」

秀懷貞敏早悟三空之心長契神情先覺
四忍之行松風水月未足比其清華仙
靈明珠註能方其朗潤故以智通無累
神測未形超六塵而迥出非空聖教序名矣

阿部 恵泉

165×45cm

前衛書
(四谷)

角田 悠香

「秋の予感」

60×180cm

◆筆の流れに乗って構成されている。
その中で紙面の中央が少々重い感じが
するのは気の入れすぎか。 (倫子評)

◆白の渴筆が美しく流れ空間に響いて
いる。小さな飛びも効果的だが、中心
に少し重さのある線がほしい。 (蒼玄評)

◆前衛書の題はとつくりと胸に落ちる
ことが少ない私ですが、この作はびつ
たり。広く深く美しい。 (明子評)

角田 悠香



◆大胆な運筆で、大きな広がり、呼吸
を感じる作。やや渴筆がすべり過ぎの
感があり、沈着さがあれば。 (大雲評)

(大雲評)

◆聖教序を温和にとらへて暖かさ
を感じさせる。古典には独特のゆ
がみがあるがそれを一步進めてみ
ては。 (蒼玄評)

◆着実な臨書態度を感じます。潤
渴の変化にやや不満が残るが集字
聖教序の特徴をよく捉えている。

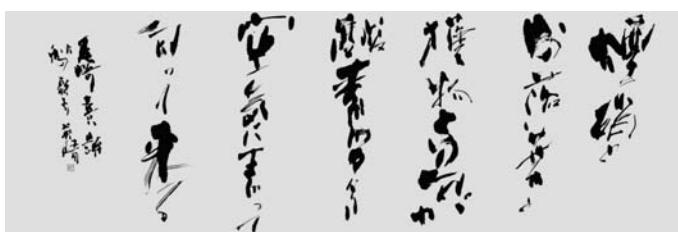
(大雲評)

◆着実な臨書態度を感じます。潤
渴の変化にやや不満が残るが集字
聖教序の特徴をよく捉えている。

(大雲評)

◆聖教序を温和にとらへて暖かさ
を感じさせる。古典には独特のゆ
がみがあるがそれを一步進めてみ
ては。 (蒼玄評)

鈴木 英晴



60×182cm

現代詩文書
(安波)

鈴木 英晴

「尾崎喜八の詩」

◆固い毛の筆か、するどくナイフの
ように切れ込んでごみがある。中
心部に渴筆あれば更に輝くか。

◆魅力ある字形が連なり、リズムあ
り。行間の微妙な揺れが大きな動き
となつて絶妙。稍、墨量過多?

◆行間を広く取り、リズミカル表現
で紙面に動きを与えていた。墨色が
やや平板で平面的になつたか。

◆つい口づさみたくなるようなリズ
ムを感じる。かすれの線の動きと次
に移る線の連結に気を使って。

(倫子評)

(大雲評)

漢字

「白居易詩」

江本興舟



長島櫻雨書

174×45cm



「由美子の句」

◆包み込むようなやしさが伝わる作品。見せ場の「蓮」はよいが字形がすべて丸味を帯びるのは一考。（蒼玄評）

◆平安な心境が伝わる筆致、墨色は静かで美しい。身辺に何か大きな変化が起つたのでしょうか？（明子評）

◆宿墨による潤渴の変化が柔らかな筆致で生きる。すつ
きりと明るい作。墨色の工夫研究を更に。（大雲評）

日高睡足猶慵起小園垂幕不怕寒
青鐘敲極聽香爐篆雪撥簾看遠蘆
便是逃名地司馬何忘遠志官以秦身寧
是歸空故鄉伊獨在長安

江本興舟書

170×53cm

◆高い集中力の中で生まれたリズムに乗った作と拝見。所どころに線が痛いと感じるのは私だけ?

◆筆先のきいた鋭い線、その中にゆったりとした動きがありて、全体の纏めは一つの流れとなっている。
(論子評)



鈴木朝夫書

60×178cm

か
な
(志引)

下

一
ね
む
の
花
一

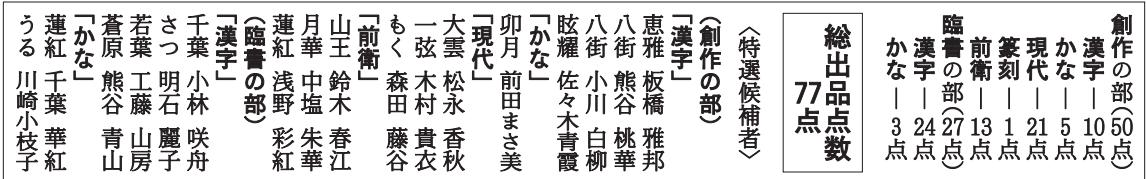
鈴木朝夫

◆流れるような句の響きを感じる。その中で墨色の変化を感じられるのは筆の運びの変化なのか。（倫子評）

◆切れのある線で全体を引きしめている。後半の渴筆には少々変化がほしいが、それは好みによるか。

（蒼玄評）

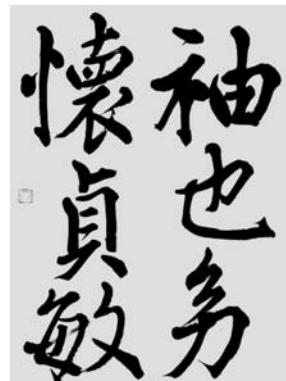
◆構成の妙、力強い線質の作品は見え十分です。歩からの四行の行頭の字の墨量、字粒は考慮のこと。
(明子評)



漢字研究部
(集字聖教序)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品



佐藤翠扇

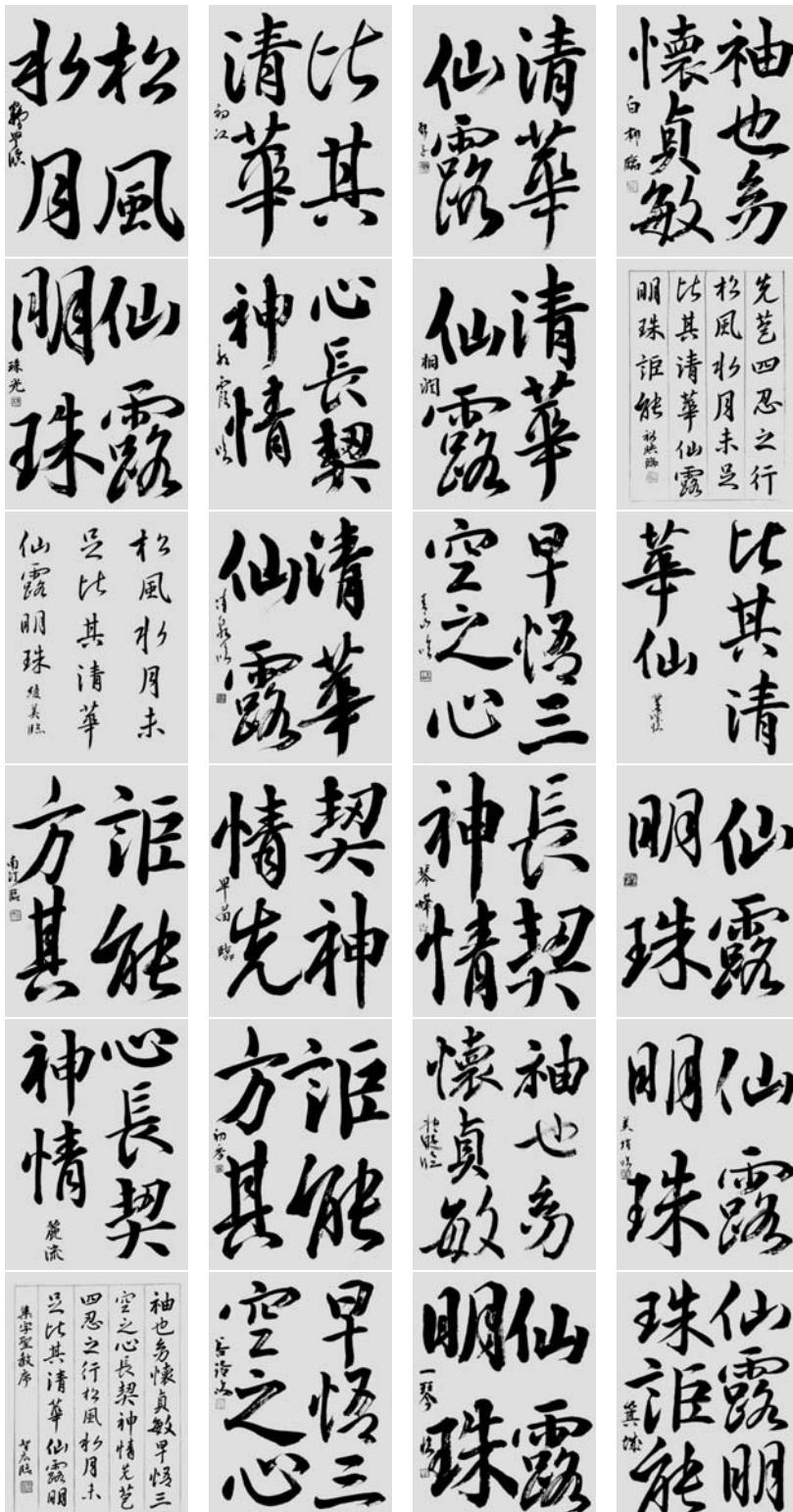
漢字研究部 特選 佐藤 翠扇

法帖をよく観察しています。起筆、終筆、速度や筆圧も自然です。六字の連続感もあって、紙面へよく収まっています。これからも益々筆捌きに磨きをかけ、切れ味の鋭さと骨力を養ってください。落款も書くのがいいでしょう。

◎漢字研究部総評

臨書には形臨、意臨、背臨があるのはご承知

の通りです。作品を見せていただくと、上位の方はそれぞれ目標を持って臨書されているのでよいと思いました。が、下位の方です。まず、写実的な臨書を徹底的に行ってください。字形の縦長。線は細めで直線もあって、楷書に近い文字もある。偏と旁の間には空間があつて明るい。こうした基本的なことを把握してから筆を執りましょう。なお、幼苞、松、露など、誤字になっている方がいました。



智麗南綾珠鶴
広流汀美光豊

谷初早佳紅初
玲香苗泉霞江

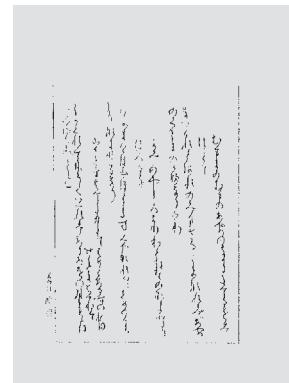
一抱琴青桐純
琴遊燁山潤子

箕美遊翠裕白
城梢春溪映柳

かな研究部
(針切)

運評 勝山初美

今月のホープ作品



永瀬蓉汀

◎かな研究部総評
全体的によく特長をとらえています。印の大きさ、半紙に対する余白のバランスにも配慮しましよう。行の傾斜による余白の美も特長の一つです。

かな研究部特選 永瀬 蓉汀
流麗な綫への流れの中に、凜とした張りのある鉛鍊された心地よいリズムの作品です。

花 美 茂
知 子 枝 夫

郁 雲 玉
子 卿 華

由 晴 雅
子 子 泉

愛 清 春
石 耀 華

石彩 A誠卯も
習 I和月く秀
道た大Nこ窓如や澄湘東京高清高千豊願春毫大澄小
か阪Hこだ水月ま春南実橋崎月真葉田綠汀泉習雲春汀

特選

犬伊石新新
銅藤崎谷井
道敏寿甘嵐藤
石子子雨泉雪

道た大Nこ窓如や澄湘東京高清高千豊願春毫大澄小
か阪Hこだ水月ま春南実橋崎月真葉田綠汀泉習雲春汀

特選

松岩池川加大宮金田深佐吉東新江岩神小志藤高
井田田藤石澤子玉澤藤田井田上谷野水井橋
美由田川

坪清五も紅千百千幕玉春森翠渡秀う樹玉硯英竜大樹翠戸A大蘭竹華A東千
和だ月葉く苑葉谷葉張松汀地柳辺水る原松水峰阪原吟出I阪鼎臘祥I緑葉
若吉大森森茂松本平林橋渡東近田庄塩佐齊後後紺近小小小
菜野和田木重郷山木本子池口橋藤子澤々藤藤野藤路林林被岡藤子由
矩彩紀睦藤真翠谷彩玉紅紀絹柳み初寿味美雅早良喜遊閑千由萩江星雅美春梨
子祥江子谷蘭景恵華霞子方子江子艸紅芳苗泉萩山窓代希

かな研究部成績表

芳大昌樹竹竜生澄も大秀秀紳秀五秀卯春澄竜土明千硯了苑英春艸蒼竜若調生幕蓮蘭艸大土前澄竜和正澄八高
蘭阪原「扇泉大春く雲歟翠畠玄水葉水月汀春泉氣漢葉水か書峰汀玄陽泉葉大張紅鼎玄阪氣橋春泉平華春街陵
佳作

青木選渡六吉遊山柳森宮松堀藤日長中富都寺津辰高鈴杉嶋渋柴狼佐佐佐齊込吳工木君北菊川龜金白確字今井石阿足會
木理みと付与木谷渡藤藤々藤山藤村島池崎井岡井井村上橋天助木坊

啓信翠一炎隆龍瑞幸藤幸千湖一雅惠ど悟幸光利麗称愛翠簾糸桂和絹蕙豐山翠春惠玉優紫萩綾楠貴英知洗实勇
江玉綾米秀扇博弘平倅雲波舟水子子苑子子華泉右乃香子子美房蕙翠舟蓮子風美乃弘麗泉二子枝介

昌洞八稲や竜東筑大広詢正四高生大鬼広梓広生大青広大蒼苑泉春玉秀彩こ昭石艸千秀誠硯正N誠も大こう櫻幕八童秀
庵書街毛ま泉小桜「雲島扇華谷崎大阪高島江島大雲峰島阪田書会汀松明だ微習玄都明和水華H和く阪だ翠張街

坂酒齊後小小高黒熊木北岸岸神川川河鹿香目小小小冲小大大梅宇内植岩入伊伊市板生五飯安新阿熟浅浅
卷井藤藤藤藤口武柳谷藤原原村又本田本元本合島川實野高川森嶋原野田木淵崎谷藤藤川倉駒十高藤井部田川川
由が美み喜寺佐喜

麗花桂美つ知さ智玄竹紫香輝尚欣春秋東典南茱紫三和裕富窓理加西和彩喜信虹華皓如美洋悠紫英良順藤萩佳幹代瑛青紅な君

子え子え子城葉蘭子子峠茜子子汀仙仙男敬子子萩絵都鈴子香代子祥泉風子子花邦子子竹花米生子美沙彩江子

う京北も竹や英右千艸春梵こ五皓幕大京A有や洞は椿詢遊北正一大玉泉春泉玉大英幕春大竹道安誠生う八八松眩竜N
選る橋陸く美ま川峰田葉玄汀だ葉映張阪橋I秋ま書せ翠扇雲陸華阪葉会汀会松阪張光阪扇波和大生雲村耀泉H

137渡吉吉横山谷村村村富三宮三真松松堀藤福平演長橋野西永中富遠辻田田田田田高高高鈴鈴新近志溢篠七鹿佐櫻坂
名姓氏名略邊田田種山口知山田田野宅川嶋田庭田島佐川村田田田谷本村澤岡井村田山原野中中中橋橋司井木木谷條村谷田條田本
天佑四藤蘭律美龍萩笑珠津白洋敏ケ映翠白魯昌キ美竹久日陽彩悦宏一萩希洋惠可耶美蒼賢久小えや翠三抱典美裕志青龍み
川子子玉舟子子峰堂華風枝楊子ミ華舟鈴春子子和雪子と鈴子子琴彩子子三衣枝子雲子子光郎舟子子美江霞貞よ